

泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28176

e. 鏡花作品中の能—金沢能楽美術館舞台展示より—

本展では能面や能装束、作り物などから能舞台の様子を再現した。前期は『歌行燈』にちなみ「海人」を、後期は『卵塔場の天女』に登場する「羽衣」を取りあげた。

(1) 前期『歌行燈』より「海人」

『歌行燈』では仕舞「玉之段」が物語の重要なモチーフとなっている。ヒロインお三重は、父が亡くなった鼓ヶ嶽の雑木林の中、五十鈴川の音をバックに、敵でありながら惹かれあう喜多八より「玉之段」を神憑りのように伝授されるのである。能『海人』の舞どころ謡どころを凝縮したこの仕舞は、乳の下を掻き切る所作などの具体的な舞が劇的な印象を残す一曲である。仕舞では面や装束を付けず、紋付き袴に扇一本で謡と舞のみにより表現されるが、能では面や装束の取り合わせがシンプルな舞台上にて大きな演出効果を発揮する。

能『海人』の前場、主役である藻を刈る海人が、縫箔を腰巻きにして、その上に水衣をまとった労働中の女性を表す質素な出で立ちで登場する。縫箔とはその名の通り刺繍と摺箔で加飾した装束。能装束には紅入（いろいろ）と紅無（いろなし）という区別があり、ここでは役柄にあわせて瀟洒な色合いのものが用いられる。ところが後場になると雰囲気は一変し、海人は絢爛豪華な龍女に変化する。展示ではこの後場の様子を再現した。龍女のまとう〈紅地雲菱に龍丸文舞衣〉（明治時代 当館蔵）は鮮やかな紅地に金糸で龍丸紋を躍動的に織り出したもの。うつろな表情の女面〈泥眼〉（江戸時代中期 個人蔵）は、妖気を漂わせながらも気品を備える。その名の通り白目部分と歯に施された金泥が、超人的、神霊的な存在であることをあらわしている。頭上に金と極彩色で装飾された〈龍戴〉（現代当館蔵）という冠を載せた龍女は、法華経の功德により成仏を遂げた喜びの舞を舞う。

(2) 後期『卵塔場の天女』より「羽衣」

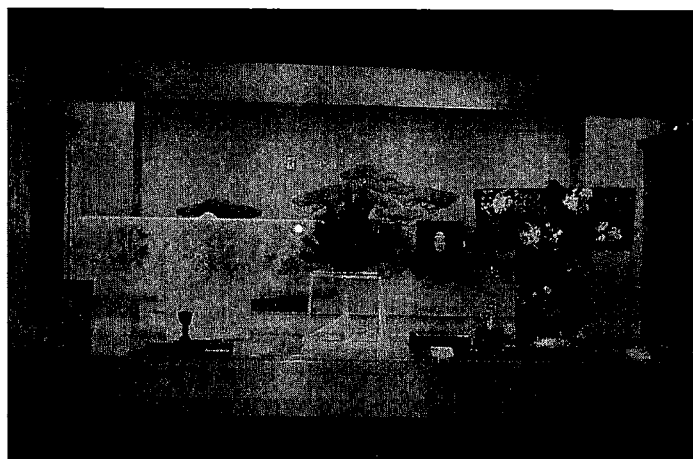
『卵塔場の天女』（昭和2年）は、能楽師を主人公とした鏡花の能楽ものの代表作のひとつ。北国出身の主人公が霜月、紅葉の好季節に年一回の故郷の催能招かれ、当流第一人の役者として「羽衣」を舞う。主人公の橘八郎には、鏡花自身の生い立ちに伯父で宝生流の元老・松本金太郎と、その息子で家元同格とされた松本長のキャラクターとが重ねられている。とりわけ松本長の舞う「羽衣」は世評が高く、他流の役者も観に押しかけるほどであったといい、そのようなエピソードも創作のヒントとなったことであろう。なお執筆の直接のきっかけは、俳優の花柳章太郎に同行した鏡花の帰郷であるが、八郎が「羽衣」の舞台上で突然女性に平手打ちを食らわされた場面は、明治30年6月20日、梅若舞台での催能において、観世清廉が舞台上に駆け上がってきた女性に首筋をつかまれ悪口を叫ばれるという能楽界未曾有の珍事件に取材したと考えられている。

本展示における「羽衣」の天女役には、艶やかな紺縞子地に金摺箔を施し、百合や水仙、菖蒲、椿などを色とりどりに刺繍した〈紺地四季草花折枝破れ七宝文縫箔〉(明治～大正時代 当館蔵)を着附とし、表着には透け感のある白絹地に扇面や流水をあしらった瀟洒な長絹取り合わせた。能面は知的な美しさを湛える〈節木増〉(江戸時代中期 当館蔵)。頭上には金の瓔珞垂れる豪華な天冠を戴く。通例天女役は紅地の縫箔を用いることが多いが、明治から昭和初期にかけての金沢能楽会では、この紺地縫箔が用いられていた。その傍らには飯島六之佐家に伝わる「烏筒」を特別に展示させて頂いた。骨瓶は並べられなかったが、紺と白のシックな装束とともに墓所での酒宴というシュールなシーンを想像していただけたかと思う。傍らには薪能「羽衣」の画像。シテの渡邊容之助師は炎で緋色に照らされ、期せずして「火の羽衣」となったわけである。

(山内麻衣子)



前期「海人」展示風景



後期「羽衣」展示風景